

令和2年度 中学校教育研究会

音楽科学習指導案

助言者 信州大学教授 齊藤 忠彦 先生
信州大学准教授 小野 貴史 先生
日時 令和2年12月18日(金)
授業学級 1年E組(41名)
授業会場 3階多目的室
題材名 「箏で奏でるオリジナル旋律」
授業者 重野 嶺美

1	本質に迫る生徒の姿	1
2	テーマ	1
3	テーマ設定の理由	1
4	題材名・学年	1
5	題材の目標	1
6	題材の評価規準	2
7	「音楽表現を創意工夫する力」を高めるための手だて	2
8	教材化	2
9	題材展開	5

信州大学教育学部附属長野中学校 音楽科

研究者 重野 嶺美 中村 和孝

1 本質に迫る生徒の姿

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる生徒

2 テーマ

音楽表現を創意工夫する力を高める指導の在り方

3 テーマ設定の理由

「箏の音色に親しもう」(令和2年9月・1年)では、箏の音色を生かして「さくらさくら」を演奏する学習を構想した。そこでは、口唱歌(くちしょうが)の言葉の響きによる雰囲気の違いに着目して、自分のイメージに合う音の出し方を検討する活動を位置付けた。その中でS生は、「のやまもさとも」の「のやまも」の口唱歌が「ツンテンチンテン」であるのに対し、「さとも」が「ツンコロリン」であることから、『コロリン』の響きは、『ツンテンチンテン』のメリハリがある感じに比べて滑らかに転がる感じがする。」と発言した。その後、S生は、滑らかさを出すために一音一音が止まらないように音を出したが、転がる感じを表現できずにいた。しかし、Y生の『コロリン』の『リン』に向けて響きは段々弱くなっていく感じがする」という発言を受け、さらに弾き試し、『コロリン』の最初の音をはっきり出し、段々と弱くなる感じにすることで、滑らかに転がるようにしたい。」と考えをもった。このS生の姿を、本校音楽科は、口唱歌の言葉の響きから感じ取った雰囲気に合う音の出し方を検討することで、どのように演奏するか思いや意図をもった姿と捉えた。このことから、箏の音色を生かして「さくらさくら」を演奏する学習において、口唱歌の言葉の響きによる雰囲気の違いに着目して、自分のイメージに合う奏法を検討する活動を位置付けることは、音楽表現を創意工夫する力を高めることに有効であることが見えてきた。

また、K生が、「さくら」の部分の「ツンツンテン」を「ツーンツテン」と長さを変えた口唱歌で歌ったところ、N生は「口唱歌の長さを変えると、メリハリのある感じから跳ねる感じに変わった。」と発言した。このN生の姿を、口唱歌の長さ(リズム)の違いによって、雰囲気が変わること気付いた姿と捉える。このことから、箏を用いた表現領域の学習においては、口唱歌を用いることで、音楽を形づくっている要素の働かせ方によって生まれる雰囲気の違いを比較しやすくなり、そのような活動を位置付けることが、音楽表現を創意工夫する力を高めていくことにつながるのではないかと考えた。

そこで、「箏で奏でるオリジナル旋律」において、音のつながり方の特徴と表したいイメージとの関係を捉え、創作表現を創意工夫して旋律をつくる学習を構想する。そこでは、口唱歌を用いて、音楽を形づくっている要素の働かせ方によって生まれる雰囲気の違いを比較する活動を位置付ける。そして、音のつながり方による雰囲気の違いに着目して、旋律を検討する活動を位置付ける。このような学習によって、音楽表現を創意工夫する力を高めることで、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる生徒の姿の具現に迫ることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

4 題材名・学年 「箏で奏でるオリジナル旋律」・1年

5 題材の目標 ※【 】内は、学習指導要領との関連を指している

(1) 知識及び技能 【A(3)イ(ア)・ウ】

音のつながり方の特徴について表したいイメージと関わらせて理解するとともに、創意工夫を生かした表現で旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組み合わせなどの技能を身に付け、創作で表すことができる。

(2) 思考力、判断力、表現力等 【A(3)ア】

旋律を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる。

(3) 学びに向かう力、人間性等

音のつながり方による雰囲気の違いに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組むとともに、音楽文化に親しもうとする。

6 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知音のつながり方の特徴について表したいイメージと関わらせて理解している。 技創意工夫を生かした表現で旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組み合わせなどの技能を身に付け、創作で表している。	思旋律を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。	態音のつながり方による雰囲気の違いに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組もうとしている。

※新学習指導要領の全面実施を見据え、本指導案では三観点にて示しているが、実際に記録に残す評価については、現行の四観点で行う。

7 「音楽表現を創意工夫する力」を高めるための手だて

- 音のつながり方の特徴と表したいイメージとの関係を捉え、創作表現を創意工夫して旋律をつくる学習において、口唱歌を用いて、音楽を形づくっている要素の働かせ方によって生まれる雰囲気の違いを比較する活動を位置付ける。(題材)
- どのように創作表現するかについて思いや意図をもつ学習において、音のつながり方による雰囲気の違いに着目して、旋律を検討する活動を位置付ける。(本時)

8 教材化

(1) 創作分野において「音楽表現を創意工夫する力」を高めるための3年間の構想

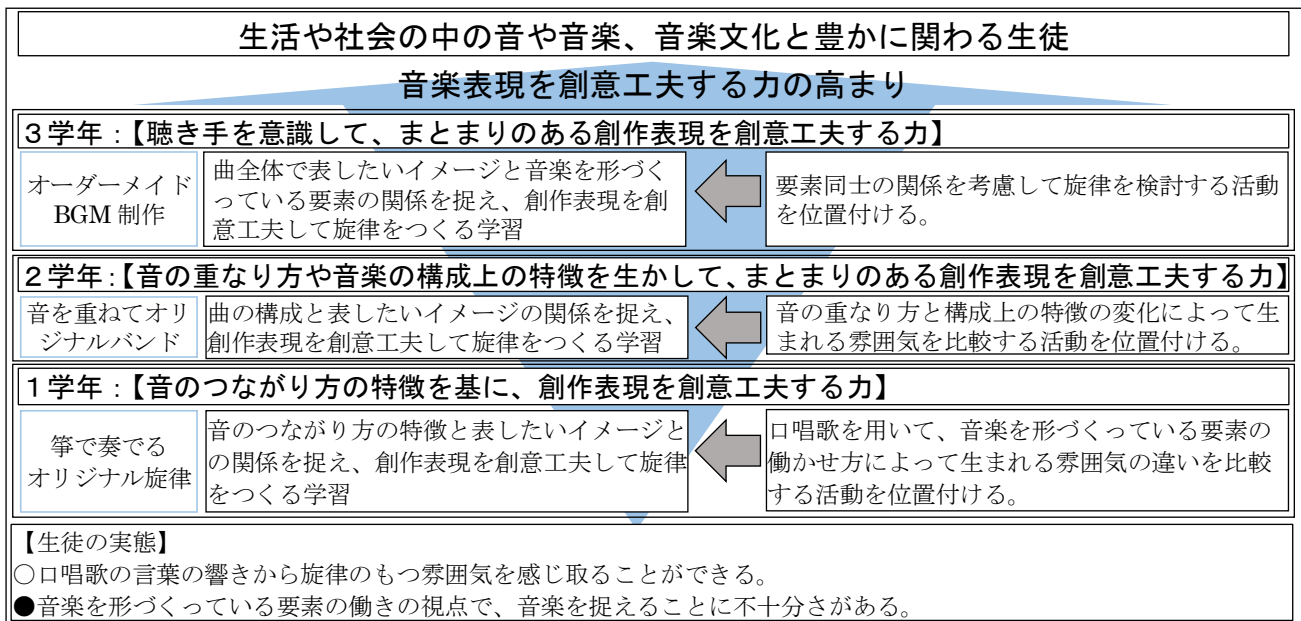
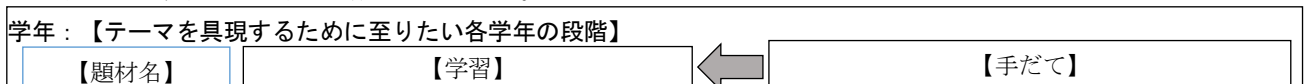


図1 「音楽表現を創意工夫する力」を高めるための構想図

※上記の図は、以下のような構成となっている。



(2) 題材に寄せた教材化

① 創作分野において口唱歌を用いる意図

音楽における創作活動は、表したいイメージを音として表す難しさがある。例えば絵や写真といった視覚的なイメージを基にした創作では、イメージが豊かになりすぎてしまい、それに合う音のつながり方などを見いだしにくくなることもある。

そこで本題材では、平調子（ひらちょうし）に調弦された箏で、口唱歌を用いて、様々に音のつながり方を試す中で表したいイメージを喚起していく。口唱歌は、奏法や音の感じなどを言葉で表したものであるが、これを創作分野において用いる意図を3点挙げる。1点目は、和楽器の音色が言葉としてイメージしやすい点である。2点目は、口唱歌の長さを変えたり、当てはめる音の高さを自由に選択したりすることで、音の長さ、高さなどの旋律の視点から、即興的に音のつながり方を試すことができる点である。例えば「ツン」から「ツーン」へと音の長さを変えたり、同じ「ツンテンチン」でも音の高さを変えたりして弾き試すことで、雰囲気の違いを感じ取りやすくなる。3点目は、創作において音の選び方に限定をかけられる点である。例えば、「ツンテンチン」（図2①）、「コロリン」（図2②）という口唱歌であれば、いずれも開始の音の高さは自由に選択できるが、前者は隣り合う3本の糸のみを使い、後者は3本の糸を高い方から順に弾くといったように音の選び方が限定される。こうすることで、自然と平調子にふさわしい音のつながり方となるため、生徒は、平調子らしさを感じながら、表したいイメージを喚起していき、それに合う音のつながり方を追究しながら、旋律をつくっていくことができると考える。

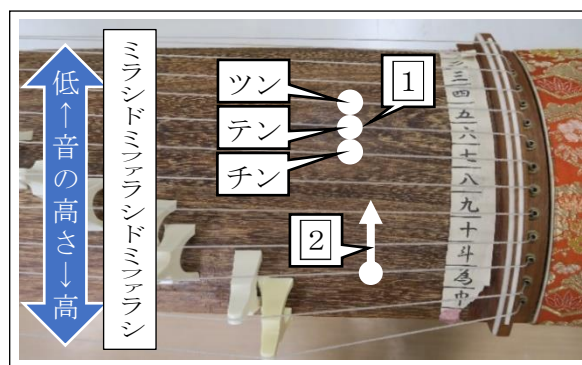


図2 箏の構成と口唱歌による音の配置

以上のことから、創作分野の学習において口唱歌を用いることとした。

② 音のつながり方の特徴と表したいイメージとの関係を捉え、創作表現を創意工夫して旋律をつくる学習において、口唱歌を用いて、音楽を形づくっている要素の働かせ方によって生まれる雰囲気の違いを比較する活動を位置付ける

第1時、教師は器楽分野で学習した口唱歌を提示し、「ツンテンコロリン」に合わせて、自由に音を選択し、旋律をつくる場を設ける。生徒は、弾き試しながら、様々な旋律をつくるだろう。続いて各自の旋律を順に発表させると、生徒は旋律を聴き合う中で、音のつながり方の違いに気づき、同じ口唱歌から多様な旋律が生まれる面白さを感じるだろう。ここで生徒のつくった旋律から音のつながり方の異なる旋律を紹介し、それぞれから受けた雰囲気を問う。生徒は、「高い音中心につなげた旋律は明るさや華やいだ感じがするが、低い音中心の場合は落ち着いた感じがする。」「『ツンテン』と『コロリン』で、前半が高く、後半が低いと、曲が静かに終わる感じがする。逆だと明るく終わる感じがする。」などと発言するだろう。教師はこうした音のつながり方による雰囲気の違いを整理し、「自分でつくるなら、どのような旋律にしたいか。」と、問う。生徒は、「明るい感じの旋律」「落ち着いた感じの旋律」など、おぼろげながら表したいイメージをもち始め、ある程度の長さをもつ旋律をつくりたいと願うだろう。そこで教師は、題材の学習問題「自分が表したいイメージの旋律はどのようにしたらつくれるのだろうか」を設定する。生徒は、音の高さを変えただけでも旋律のもつ雰囲気が変わったことから、音の長さや口唱歌の組み合わせを変えれば表したいイメージに合う旋律をつくれるのではないかという見通しをもつだろう。

第2時、教師は、「音の長さを変えればよいのではないか」と考えた振り返りを紹介

し、学習課題「音の長さを変えた旋律をつくり、その旋律がもつ雰囲気と比較しよう。」を据える。生徒は音の高さは変えずに、音の長さを変えた旋律をつくりながら、雰囲気の違いを比較していこう。すると、『コロリン』の前の音を長くすると、『コロリン』で少し動きが出る感じがするけれど、『コーロリン』にすると、また違った感じがする。」など、音の長さによる雰囲気の違いに気付いていこう。そして、音の高さや長さによって旋律のもつ雰囲気に違いがあることを見いだした生徒は、口唱歌の組み合わせを自分なりに考えて、旋律をつくりたいという願いをもつだろう。

第3、4時、音の高さや長さの他にも口唱歌の組み合わせを工夫すれば、表したいイメージの旋律が作れるのではないかという生徒の見通しから、学習課題「口唱歌を組み合わせ、オリジナルの旋律を作ろう。」を据える。生徒は、これまで学習した口唱歌の順番を入れ替えて、様々な組み合わせを考える。そして、そこに音を当てはめ、弾き試しながら、おぼろげながらもっていた表したいイメージを明確にしていこう。また、自分で旋律をつくることの面白さや、表したいイメージに合う音のつながり方を見つけていくことの難しさを感じながらも、音のつながり方の違いによって雰囲気が変わることを手掛かりに、再度表したいイメージに合う音のつながり方について考え、旋律を検討していこう。

以上のように、本題材において、口唱歌を用いて、音楽を形づくっている要素（旋律）の働き方によって生まれる雰囲気の違いを比較する活動を位置付けることで、音のつながり方によって生まれる雰囲気と、自分が表したいイメージとの関わり捉えていくことができると考える。

(3) 本時に寄せた教材化

どのように創作表現するかについて思いや意図をもつ学習において、音のつながり方による雰囲気の違いに着目して、旋律を検討する活動を位置付ける

本時、教師は、表したいイメージに近付いている生徒の旋律を紹介し、そのイメージに近付けるためにどのような工夫をしているか、演奏された音や、楽譜を基に考えるよう促す。すると生徒は、「前半では、悲しい感じを出すために、低い音を使ったり、間ができるように長い音を使ったりしているのではないか。」や「後半では、明るい雰囲気を出すために、高い音や短い音を使ったり、短いコロリンを入れたりしているのではないか。」などと、工夫点を述べるだろう。教師は、このような音の高さや長さ、口唱歌の組み合わせの変化や、それによって生じる雰囲気の違いに着目していけばよいのではないかという見通しを確認し、学習課題「音のつながり方による雰囲気の違いに着目して、旋律を検討しよう。」を据え、旋律をつくる場を設ける。

生徒は、表したいイメージに近づくように、口唱歌の組み合わせを変えたり、箏で弾き試したりして検討するだろう。例えば、華やかな雰囲気を表したいと願う生徒は、華やかさから綺麗に流れるイメージを連想し、低い音から高い音へと音をつなげたり、「コロリン」を入れたりすればよいのではないかなどと考えるだろう。そうすることで、「音の高さを最初低くして、段々と上げて盛り上がりをつくったり、音の長さを短くしてスピード感を出したりすれば、表したかった華やかなイメージを出せる。」や『ツンテン』と『ツンテン』の間に『コロリン』を加え、高い音を当てはめれば、綺麗に流れるイメージを出せる。」など、思いや意図をもって旋律をつくっていけるだろう。

以上のように、音のつながり方の特徴と表したいイメージとの関係を捉え、創作表現を創意工夫して旋律をつくる学習において、口唱歌を用いて、音楽を形づくっている要素の働き方によって生まれる雰囲気の違いを比較する活動を位置付けたり、音のつながり方による雰囲気の違いに着目して、旋律を検討する活動を位置付けたりすることで、生徒は「音楽表現を創意工夫する力」を高めていくことができると考える。

9 題材展開 音のつながり方の特徴と表したいイメージとの関係を捉え、創作表現を創意工夫して旋律をつくる学習 全5時間 本時は第4時

段階	◆学習 教師の指導・支援	予想される生徒の反応	評価の 観点	時間
導入	<p>◆音の高さや長さの変化による雰囲気の違いを捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師が提示した「ツンテンコロリン」の口唱歌に自由に音を当てはめ、リレー奏をする場を設ける。 アのような発言を受けて、生徒がつくった旋律から、音のつながり方の異なるものを取り上げ、それぞれの旋律がもつ雰囲気を比較できるようにする。 自分でつくるならどのような雰囲気の旋律にしたいか問う。 エのような発言から題材の学習問題「自分が表したいイメージの旋律はどのようにしたらつくれるのだろうか」を設定し、見通しをもてるようにする。 	<p>ア 「さくらさくら」の最初の音の感じが好きだったから、七から始めて七八九八七でやってみよう。同じ口唱歌でも使う糸によって、様々な旋律をつくることができ面白い。</p> <p>イ 高い音中心の旋律は明るさや華やいだ感じがするが、低い音中心の旋律は落ち着いた感じがする。</p> <p>ウ 「ツンテン」と「コロリン」で、前半が高く、後半が低いと、曲が静かに終わる感じがする。逆だと明るく終わる感じがする。</p> <p>エ 華やかなイメージの旋律にしてみたい。どうしたら自分の表したいイメージの旋律がつけられるのだろう。</p> <p>オ 同じ口唱歌でも、音の高さを変えるだけで、旋律のもつ雰囲気が様々に変化していき、面白かった。音の長さや口唱歌の組み合わせを変えたり、ある程度の長さをもつ旋律をつくらせれば、自分の表したいイメージの旋律がつけられそう。</p>	<p>態知 （観察・ワークシート）</p>	2
	<ul style="list-style-type: none"> オのような追究の見通しから、学習課題「音の長さを変えた旋律をつくり、その旋律がもつ雰囲気を比較しよう。」を据える。 	<p>カ 「ツンテンチンコロリン」の「チン」を長くし、「ツンテンチンコロリン」にして「コロリン」の前に間がある感じにすると、「コロリン」で動きが出る感じがする。</p> <p>キ 「コロリン」を「コーロリン」にするだけで、また違った感じになって面白い。</p> <p>ク 「ツンテンチンコロリン」にすると段々と速度が上がっていく感じになる。「ツンテンチンコロリン」だとゆっくりした感じで落ち着いた感じになる。</p> <p>ケ 音の長さが変わると、同じ音の高さでも雰囲気が変わることが分かった。次は、口唱歌の組み合わせを変えて旋律をつくってみたい。</p>		
	<p>◆どのように創作表現するかについて思いや意図をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ケのような意見から、学習課題「口唱歌を組み合わせて、オリジナルの旋律をつくろう。」を据える。 旋律の長さは4から8小節以内とし、2人で一面の筆を使いながら、一人一人が旋律をつくることを確認する。 つくった旋律の糸の番号と口唱歌をワークシートに記譜するよう指示する。 	<p>コ これまで学習した口唱歌の組み合わせを変えて、旋律をつくってみよう。「コロリン」を繰り返し使っていけば流れる感じがつけられるのではないだろうか。</p> <p>サ 華やかな感じにしたいときは、高い音で「コロリン」を何回か使えばよさそう。また、伸ばした音も途中で取り入れると、より変化がついた旋律になるのではないだろうか。</p> <p>シ 「チンテンツンテンチンコロリンコーロリンテン」と、長い音を意識してつくったら、ゆったりとしすぎてしまった。もう少し流れていく感じを出して、流れるような華やかさのある旋律にしたい。</p> <p>ス 口唱歌の組み合わせを考え、筆で弾き試しているうちに表したいイメージがはっきりとしてきた。流れるような華やかさがある感じを表したいから、「コロリン」をたくさん入れて音が動いていく感じを出し、伸ばした音も少し入れてみたら自分ではいい感じになってきた。音は高い音から始めて旋律をつくってみよう。</p> <p>セ 落ち着いた感じの旋律にするために、どのような音の高さや長さがよいか考えるのが難しかった。次は、たくさん弾き試して、表したいイメージに合う旋律をつくりたい。</p>	<p>思 （観察・ワークシート）</p>	2（本時は第2時 太枠部分）

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・表したいイメージに近付いている生徒の旋律を取り上げ、演奏された音や楽譜から、どのような工夫点があるか考える場を設ける。 	<p>ソ 前半では、悲しい感じを出すために低い音を使ったり、間ができるように長い音を使ったりしていると思う。</p> <p>タ 後半では、明るい感じを出すために、高い音や短い音を使ったり、短い「コロリン」を入れたりしていると思う。</p> <p>チ 音の長さや高さ、口唱歌の組み合わせを工夫することで、雰囲気が変わってくるので、音のつながり方による雰囲気の違いに注目すれば、表したいイメージに合う旋律をつくれそうだ。</p>	15分	思 (観察・ワークシート)
	<ul style="list-style-type: none"> ・チのような意見から学習課題「音のつながり方による雰囲気の違いに着目して、旋律を検討しよう。」を据える。 	<p>ツ 友の旋律では、低く長い音を使って間をとることで、悲しい感じや落ち着いた感じが出ていた。私の旋律にも取り入れることができそうだ。</p> <p>テ 「コロリン」の連続を、最初の「コロリン」は低い音から始め、次の「コロリン」は少し高い音から始めて、五四三、七六五、九八七のように高くしていけば、はじめから高い音でコロリンを繰り返すよりも、華やかさが増してく感じが出てきた。</p> <p>ト 「コロリン」の長さを、「コーロリン」に変化させれば、跳ねるような感じになると思ったが、音が長くてゆったりした感じになってしまった。「コロリン」の前に「テーンツン」のように、長い音と短い音を入れて跳ねる感じを出してみよう。</p>	20分	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに自分の検討した工夫点を記入し、全体で共有する場を設ける。 	<p>ナ 「コロリン」を連続して使って、音の高さを低いところから、段々と高くしていき、最後に音を下げることによって、優雅で華やかな感じから落ち着いた感じを出すことができた。</p> <p>ニ 元気な感じを表すために、「コロリン」と「コロリン」の間に「テーンツン」を入れたら、「コロリンテーンツンコロリン」と音が上がって長さの変化もあるから、跳ねるように元気に遊んでいる感じの旋律になった。</p>	10分	
	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を振り返るよう促す。 	<p>ヌ 落ち着いた感じは出せたが、旋律が終わる感じをうまく表せない。どのような音をつなげていけばよいか考えて、完成させたい。</p> <p>ネ 長い音と短い音を組み合わせ、元気に跳ねる感じを出すことができた。旋律をつくっていく中で、雪の中で元気に遊んでいる子どもたちというイメージが湧いてきた。次は、春の感じが出るような旋律をつくりたい。</p>	5分	
	<p>◆<u>創意工夫を生かした旋律をつくり、自分の取り組みと学んだことを明らかにする。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・表したいイメージの旋律にするために工夫した点をワークシートに記入する場を設ける。 ・題材の学習を振り返るよう促す。 	<p>ノ 華やかさが段々と増し、最後は落ち着いて終わる感じにするために、前半は、低い音の「コロリン」を用いた。そこから華やかさを段々と出すために、「コロリン」を繰り返し使って、音を上げていった。最後は音を下げ、「五」の糸で終わることで、落ち着いて旋律が終わる感じを表現した。</p> <p>ハ 口唱歌の組み合わせを変えたり、音の高さを弾き試したりしながらつくすることで、自分の表したいイメージがはっきりしてきた。そして、音の高さや長さを変えることで、そのイメージを表す音のつながり方が思い浮かび、もっとこんな感じの旋律にしてみたいという思いが湧いてきた。</p> <p>ヒ 表したいと思ったイメージを自分の力で表現することで、曲をつくることの大変さと面白さを感じる事ができた。また、私たちが歌ったり、演奏したりしている曲にも作曲者の思いや意図が込められてつくられていることが実感できた。</p>		

技
(観察・ワークシート)